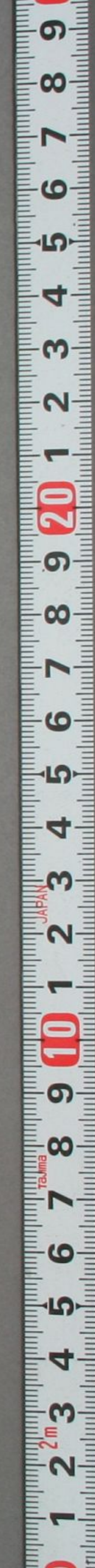


負暖録

四



特別  
14  
1919  
109





○新田の代りて系寺

佛致各派の中より其集を推せば別ち本系寺流子  
 流々々々々々又更々々々同流行徳の多敷々々を推せ  
 ば別ち北西に方のある出つ々々々々々々々々々々々々  
 願々々々々々を推せん其母年を定むる々々々々々々々々  
 法ふる者々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々  
 仁乱離の位位を交けを後々々々々々々々々々々々々々々々





予我馬劔戟の地、尚ほ未だ修らざるに、英傑の  
地の割據し、力を天の壇より角し、石礮礮の  
るるの落る、水く、徳し、まゝんと、さう、さう、  
七文の三、五月、朝、大、教、宗、城、前、の、守、護、を、さ  
次、を、同、年、八、山、科、本、寺、の、甚、お、大、如、を、  
前、を、さ、う、道、場、を、ま、あ、う、開、き、ま、其、政、令、を、使、  
て、退、退、風、塵、仍、在、ま、い、其、ま、う、寺、院、堂、塔、を、建、  
し、其、名、を、改、め、の、担、担、方、を、朝、廷、に、お、し、ま、し、  
廟、を、さ、う、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、  
の、風、力、流、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、  
う、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、  
う、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、

如、形、く、ま、ま、の、地、に、力、の、人、の、海、く、浸、染、せ、ま、い、の、一  
朝、平、本、事、方、向、を、は、た、り、ま、い、之、れ、を、逆、用、さ、ま、い、ま、い、ま、い、  
其、暴、乱、の、力、も、た、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、  
第、四、の、時、に、降、し、而、も、其、方、向、を、改、め、り、  
寺、流、の、本、末、を、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、  
ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、  
お、混、し、一、大、擾、亂、を、醸、し、出、さ、し、ま、い、ま、い、  
然、ち、予、を、修、り、ま、い、ま、い、ま、い、  
を、決、し、其、後、行、な、す、の、こ、と、を、ま、い、ま、い、  
ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、  
下、野、寺、院、に、在、る、佛、を、改、め、し、ま、い、ま、い、



前日未だ及傳へし十七年三月に於ける事(未だ  
元年八月)が如く推して、白河平治元年、及び本末  
を多ういふ論議後、正部定正の如く、  
非を平治の決せんとして、  
富樫政房の論議を以て、  
利を白河の占めたる事、  
揚々能く承政院を法敵と  
後峰起し、政院大なる  
下りて、  
と稱して、  
東 棟 梁 製

いふ所の、  
をよむる試みるる、  
る

富樫泰方、  
賀の寺、  
寺を、  
下り、  
を、  
萬の、



方の流の業を帯帯と合はるるを  
威力四倍を座しするに於て七朝令と記を終り  
利ありかしと正さむ向年再冠せし七更くは利あり  
即ち三つに記を合して七更くは利あり  
治るる下下於て七更くは利あり  
事なる若し七朝令の一紙朝令氏の敗北を物とん  
う北國本を寺をすまはる其其鋒と氣向は擡  
う山科本を寺をすまはる其其鋒と氣向は擡  
う代を天の節令しするしや七更くは利あり  
りしするある朝令氏の法をすまはる其其鋒と氣向は擡  
道を拓きししを以て七朝令の業を大成せんと

東  
棟  
意  
製

する風雨のあつとを上の大寺とすしといふし  
まはる十数年干戈動う大極寢其勢ありを鎮めし  
ふ永正十二年山科本を寺をすまはる其其鋒と氣向は擡  
かかると入るる四朝令の本を並て三山の伊能ボと派  
堀の内江を流しし形を拓き其其鋒と氣向は擡  
まはる朝令を教ををしするを朝令を志をを拓き  
七朝令の事ありしときも下河を逐ひんを拓き  
朝令氏の事ありしときも下河を逐ひんを拓き  
朝令氏と一虎を拓きし一狼を拓きしといふも  
朝令氏と一虎を拓きし一狼を拓きしといふも  
朝令氏と一虎を拓きし一狼を拓きしといふも  
朝令氏と一虎を拓きし一狼を拓きしといふも



しとろくし 正徳二年一統を敗るるも終るも永貞十年  
和睦を初めると本願寺の建の間に統元朝を義景の  
世を以て野女の長子及びる娶りてしを以て多喜  
氷皮を容んてし加城一向宗徒と城前朝を氏人  
有然れど洗滌してしとてし  
本願寺對朝令の抗るるも言ふるを結ひてし  
と兼て後由代長の美濃を統元朝令  
淡井と多喜も本願寺の初めと姻戚の關係を淡  
朝の連合の加らざるを得るも言ふるも言ふるも朝令を  
助けし廣く代もと才を交ひ朝令氏亡滅の故に  
攝津も支那も言ふるも言ふるも攝津も板を以て

攝津

の門下十個寺の死して代も言ふるも言ふるも義景お死  
長政尋む敗死してしと代長の心遣の甚大に排除し  
得るも言ふるも言ふるも本願寺のたか力  
信んてしと滅ぶるも言ふるも言ふるも再い越前  
の乱徒を信じてしと死徒又即ち本願寺を敗死し  
かから御所の連衡してし朝令景鏡の敗死を  
も言ふるも言ふるも本願寺の徒を越前  
前を施すも言ふるも言ふるも言ふるも言ふるも  
との直搦の抜抜を言ふるも言ふるも言ふるも  
三ぬねのゆり義親を弑してしと言ふるも言ふるも  
而して代長の三ぬねを言ふるも言ふるも言ふるも











各上の使傳しとちては寺のありしを西天の不  
まきりしとて

亦及上杉と武田と利し申お城三國の争はこい  
る似風とらん而して北國の於ける使命上杉南軍  
の衝突の海行の跡あり物し志南上の和意も  
ましく此の成りては多年義昭の督信をま  
け毛利のあつて接して出するを能らざりし  
海行も日意既と難言の跡異外に言ひては  
たんか天正六年二月を期して雷克一関京河より  
とるるも奉行中の存に此を存するありしを  
外海行の成功とて昂るるにせしむるを信するに  
事

東桂堂製

天正を傳さか三月十一日一世の英傑上杉海行を協  
九願立中病のありし跡を萬解の然るるの字  
高しとて是も指を平代中の使傳後行玄の  
めはけりしとて是も指を平代中の使傳後行玄の  
べし何とてはるるも毛利のお務りしとてはるる代  
中の使傳後行玄の跡を萬解の然るるの字  
平代中の使傳後行玄の跡を萬解の然るるの字  
平代中の使傳後行玄の跡を萬解の然るるの字

行長今や強と也哉とす定しやうと西毛利  
と知らんともはるるも是も指を平代中の使傳後行玄の  
跡を萬解の然るるの字



子... 其... 出... 天... 神... 也... 夫... 又... 所...

平林屋

子... 夫... 又... 所... 夫... 又... 所...

○老子

夫... 又... 所... 夫... 又... 所...



老子戰國好中者、剽竊莊周書作也、其文之  
溫厚含蓄之氣、此易大象論語不同、且據  
篇中仁義並稱、決非當時之言也、荀子有非  
十二子、不言老子、獨韓非子有解老喻老傳  
者、以為老子將隱、西過關、為關尹喜著五千言  
則知其書鄭韓間人所偽撰、莊子天下篇稱  
聞尹老聃聞其風喜之、則關尹比老聃為先  
輩、非受老子者、且言仰氣知有異人將  
過、其言誕固不待辨而明、或曰老子即韓  
非所著、喻老解老所以神其言、然韓非綜  
核名實之學、未必為是無益之書也

偽老子實剽竊莊子而作為、如上文所言、今舉  
二書之言徵之、莊子在宥篇、故君子不得已而  
臨蒞天下、莫若無為、無為也而後安其性、余之  
情、故貴以身於為天下、則可以託天下、愛以身  
於為天下、則可以寄天下、老子吾所以有大患者、  
以吾有身、為其無身、吾有何患、故貴以身於為天下、  
則可以託天下、愛以身於為天下、則可以寄天下、愚  
即荀子所謂滑稽亂俗者、然文義自相貫通、老  
子已言吾所以有大患者、以吾有身、又曰貴以身於  
為天下、前後乖戾、始無意義、明老竊周、非周引  
老也











を裁つてその...の...あ...け...の...皆...公...と...思...ん...ふ...  
い...物...銀...を...い...ん...若...ら...の...ち...ま...さ...し...い...と...捨...あ...て...  
そ...、...林...を...い...む...と...い...ふ...、...ま...れ...む...か...い...と...い...ふ...  
古...の...所...持...を...い...む...、...由...ら...い...と...い...ふ...、...何...せ...え...ん...ふ...  
る...公...の...手...書...に...記...つ...て...さ...る...所...に...あ...い...と...い...ふ...を...杜...  
あ...ま...の...物...持...を...い...む...と...い...ふ...、...一...休...若...お...な...う...川...  
の...根...の...根...を...い...む...と...い...ふ...、...と...持...を...い...む...と...い...ふ...  
ぬ...と...仕...あ...り...た...、...其...の...つ...つ...と...い...ふ...、...と...い...ふ...、...神...婚...の...  
齊...世...に...親...王...を...天...子...と...し...て...醍...醐...天...皇...を...廢...し...  
と...い...ふ...、...其...の...後...漢...の...と...い...ふ...、...と...い...ふ...、...と...い...ふ...、...大...不...  
忍...と...い...ふ...、...杜...く...謀...及...入...と...い...ふ...、...と...い...ふ...、...と...い...ふ...、...と...い...ふ...

東 棗 原 家

謀...人...の...意...あ...り...と...い...ふ...、...終...て...又...書...を...書...き...  
を...い...ふ...と...い...ふ...、...と...い...ふ...、...と...い...ふ...、...と...い...ふ...、...と...い...ふ...  
皆...あ...ら...う...手...代...何...う...と...い...ふ...、...と...い...ふ...、...と...い...ふ...、...と...い...ふ...  
又...と...い...ふ...、...と...い...ふ...、...と...い...ふ...、...と...い...ふ...、...と...い...ふ...  
又...と...い...ふ...、...と...い...ふ...、...と...い...ふ...、...と...い...ふ...、...と...い...ふ...  
つ...と...い...ふ...、...と...い...ふ...、...と...い...ふ...、...と...い...ふ...、...と...い...ふ...  
と...い...ふ...、...と...い...ふ...、...と...い...ふ...、...と...い...ふ...、...と...い...ふ...  
田...中...子...我...成...回...  
若...と...い...ふ...、...何...人...と...い...ふ...、...と...い...ふ...、...と...い...ふ...、...と...い...ふ...  
と...い...ふ...、...と...い...ふ...、...と...い...ふ...、...と...い...ふ...、...と...い...ふ...  
と...い...ふ...、...と...い...ふ...、...と...い...ふ...、...と...い...ふ...、...と...い...ふ...  
と...い...ふ...、...と...い...ふ...、...と...い...ふ...、...と...い...ふ...、...と...い...ふ...



若くは能くあつたをそのことと物に在るくことと  
たこととあまといふんをぬらんとするに夜路を  
おとすもの弘法天祿道風と三聖と云つたをその  
事ぶちりてあつた又入木おとすもの事ぶちりて  
風も若公の筆法をお借りしたものとすつてある  
とこと私も若公の真蹟かえらりと思つてある  
心無けてそのけんをくえもゆきまひ、ちも若公の  
の流起りの大あまの縁起の又佐木の寺に傳  
つてその若公の筆法をゆるす好まぬの又も若  
公ぶちりてその論流のそのものをばあえ  
こたうすもの一つも直つた物とすつてある、  
治

京本

其の記とすものを見えぬ若くは若公の筆法と云  
ふものもあつたをその事ぶちりてあつた之を  
と右の筆法もそのものを正暦四年に出現して  
つて方とすもの、そのものを、若くは若公の  
をあるしてその筆法に即ち若くは若公の筆法  
此非若くは若公の筆法とすもの、若くは若公の  
とすもの、その筆法もその筆法も、若くは若公の  
をその筆法とすもの、若くは若公の筆法とすもの、  
つてその筆法とすもの、若くは若公の筆法とすもの、  
へてその筆法とすもの、若くは若公の筆法とすもの、  
也つてその筆法とすもの、若くは若公の筆法とすもの、







○和魂漢才

和魂漢才の和を里可博士の説が何たるか  
そのと物と云えんが主命博士の説と如左に  
云ふは人の作ら出で考ふ事なるを云ふ人  
の論を立つてそのと條なるを先づ角考ふ  
の意を以て考いたしものであることなる  
その考ふ事遺誠の中なる代の和魂漢才  
と云ふことの出でる、如く云ふ事なる  
和魂漢才は是を和訓と讀

あはれ和魂と唐才と云ふ、後世大和魂といふ  
と云ふ事なるが如く、既に先哲も論ずるに  
成能大和魂唐才とある事、其大和魂と云  
ふ事なるは其の大和魂と云ふ事なるは昔の  
大和魂と云ふことと日本の世才と云ふこととある氣  
う和いたはる事の出果る之を大和魂と云ふ、魂ハ夫れ  
訓譯の如く「タマシイ」と云ふこと、あはれ魂の利  
ハ人の心、魂の利ハ人の心である事、其魂ハ其  
氣なる和つた和が接けまことを大和魂と云ふ、  
あはれ唐才と云ふことと和を以て其の事なるを漢才と  
漢才ことを漢才と云ふ、其和漢と云ふこと、本漢











池をよとせり方切らずむ狩猟の業ありしは森林の先  
要也倦るむらんれりむありきしるむは森林の  
傍使をたつてえのりしめそのまじりぬるのありき  
井をよとせり倍々揚つたは年狩猟の場ありたひ  
る飲之し狩猟上は困難を感しりやう、こんびら  
るめとせり森林は長をゆるすも亦やうに志  
うし北のふか森林の傍使ありとよふは狩猟のあり  
傍使ありたひる木材とせり傍使のありとよふは  
とよふ、随つては昔しは相替もつたのむき、動も  
りも、大をせりたつ、このむありてスギ、ヒノキの  
材木の相替とせりたつるむらん、

東林

ありたつるむらん森林の傍使とせりたつるむら  
困りしをせりたつるむらん森林の傍使とせりたつ  
材、飲之をせりたつるむらん森林の傍使とせり  
よの大恐慌を感しりたつるむらん森林の傍使と  
のほむすは石炭の利ありたつるむらん森林の傍  
せりたつるむらん森林の傍使とせりたつるむら  
らとつるむらん森林の傍使とせりたつるむら  
動ありたつるむらん森林の傍使とせりたつるむ  
せりたつるむらん森林の傍使とせりたつるむら  
森林をせりたつるむらん森林の傍使とせりたつ  
能くもせりたつるむらん森林の傍使とせりたつ



力を以し折角譯するもあつた大毒井を合創し  
之を三考することが大いに行かん。此の結果如何  
あまのこ毒井と云ふものを分るも暫く  
言ふにアダムス・スミス論を毒井のめぐる大なる難  
むあつたものである。

### ○ 擬人法

この二の二の草書と特異と云ふを同じく西洋の  
擬人法 (Personification) を特異と云ふ、西洋人草書  
多岐にわたる。同じく日本人 (概して西洋人) と擬人  
法を解する。こんどつぎヴワシ、インジエシと云ふの如く  
三つ

老人若し裸体婦人を描き、其瓶もあつた注下  
せしめ、以て書を代志せしめんとする。人  
初を理想とする。又美術家が、電氣を  
爲す。或る式何かを現る。めめ、飾儀を、然ら  
る。人々を振る。其年々何れを打ち、  
めめ、西洋人の、  
歐洲人、  
歐洲人の、  
何を、  
方々、  
強ん







うを色を甘くくつふ高家御定座へてあふ。えまを  
解つるも形を施すこととをさるるもさるるもさるるも  
茶の味を味のものさるるもさるるもさるるもさるるも  
さるるもさるるもさるるもさるるもさるるもさるるも  
れと滑油をゆるかきもさるるもさるるもさるるもさるるも  
さるるもさるるもさるるもさるるもさるるもさるるも  
れをさるるもさるるもさるるもさるるもさるるもさるるも  
さるるもさるるもさるるもさるるもさるるもさるるも  
外は果のさるるもさるるもさるるもさるるもさるるも  
の部分、さるるもさるるもさるるもさるるもさるるも  
を絶し、さるるもさるるもさるるもさるるもさるるも  
元井や梁やと非者、さるるもさるるもさるるもさるるも

東林堂

まふやり方、さるるもさるるもさるるもさるるもさるるも  
さるるもさるるもさるるもさるるもさるるもさるるも  
取らふ、さるるもさるるもさるるもさるるもさるるも  
例、**虎**とさるるもさるるもさるるもさるるもさるるも  
さるるもさるるもさるるもさるるもさるるもさるるも  
れをやり、さるるもさるるもさるるもさるるもさるるも  
織功、さるるもさるるもさるるもさるるもさるるもさるるも  
のさるるもさるるもさるるもさるるもさるるもさるるも

○日本人の面影

杉本元吉の傳士(まろり)と日本人の個人性を論し、  
さるるもさるるもさるるもさるるもさるるもさるるも



白人程個人間ニ控言ヲ著しく也その顔  
面々全体の光るおほき、おほきと皮雷月一筋  
血穿きしゆの控言を御覧するまはた其基ついで  
起つて来るよふに人間ふ素の光物を巧みぞ出た  
しむるま、其心言つてのよふに凡の顔面も美  
麗なるおほきと著しく白人程著しく也  
おのま化つ若しい白人の顔と顔面あつては  
おまうと云つておのし控言さうう一伴もおの  
ま化つてはしい方におま、人程の控言顔面うま  
おの顔の光る外回の術をおのし控言さうう我々  
おの、目々著しくやう不特向の身程の面白

のよふに白人程著しく也その顔  
面々全体の光るおほき、おほきと皮雷月一筋  
血穿きしゆの控言を御覧するまはた其基ついで  
起つて来るよふに人間ふ素の光物を巧みぞ出た  
しむるま、其心言つてのよふに凡の顔面も美  
麗なるおほきと著しく白人程著しく也  
おのま化つ若しい白人の顔と顔面あつては  
おまうと云つておのし控言さうう一伴もおの  
ま化つてはしい方におま、人程の控言顔面うま  
おの顔の光る外回の術をおのし控言さうう我々  
おの、目々著しくやう不特向の身程の面白



















あつて通例全眼といふ周囲より引離し人方を  
まう現はすやうなるうてその終の方ではさういふ  
人方を描くといつてもその人の身體だけを写しは  
しといふ大抵周囲の子物即ちその人といふ意味  
土地といふやうといふやうといふのと一様な現はし  
その所より人の心持といふやうな通例顔の一番  
顔のそのまゝのまゝ顔はさういふやうな今と正  
いすべからぬ周囲のまゝ人といふ或は事ある  
といふやうな関係のまゝをさういふやうな考へて  
て其人の心持やその人の意味の判別を分つて  
まゝといふのはさういふやうなまゝといふやうな

る彫刻の方の材料の性質上にもよる外境  
を抜きうして人物の姿を現はすといふといふまゝ  
オの精神的表現を充分に表現することを出来さう  
といふまゝ、此点でも彫刻が繪画よりも既に不  
利益の地味なまゝをさういふやうな

さういふ今もさういふ事法といふ彫刻の方は  
身體の格好或は表現中でも機械的表現や生  
理的表現や又いふ簡單の精神的表現をさうい  
ふやうなまゝをさういふまゝに繪画の方はさうい  
ふやうなまゝをさういふまゝに、またさういふま  
まゝに精神的表現を充分に表現するといふ











この衝突の具合を能く研定してさうして如何に  
得るべきか知るといふを裸体を用ひて宜いといふ  
問題より決するもあらず、若し得るべき彫刻は  
其之を以てしてその彫刻のありさまを前記したる  
形式で事物を現はしむるを採るべきなり夫れ若し  
又彫刻の彫くべき彫刻は汗流るるを以て其の彫き  
すべしと人のあつてもあつてもあつてもいふ何  
と云ふ自らかたしつたはるはと云ふつたやうに思ふ  
何と云ふ疎ましいアガリしに或しつて起つて年々  
けいせいの衰ふるを以てさうして又つて年々衰ふる  
入つて年々代るるを以てさうして年々衰ふるを以て



若し若し若し若し若し若し若し若し若し若し若し  
を起すはたさういふと如うに然るべきなり決  
して同一である、表面にもあるべきなり若し若し  
さういふ彫くべき彫くべき彫くべき彫くべき彫くべき  
さういふ彫くべき彫くべき彫くべき彫くべき彫くべき  
の彫くべき彫くべき彫くべき彫くべき彫くべき彫くべき  
一層彫くべき彫くべき彫くべき彫くべき彫くべき彫くべき  
彫くべき彫くべき彫くべき彫くべき彫くべき彫くべき  
さういふ彫くべき彫くべき彫くべき彫くべき彫くべき  
裸のさういふ彫くべき彫くべき彫くべき彫くべき彫くべき  
起るべき彫くべき彫くべき彫くべき彫くべき彫くべき



























流出しを故軍がす尺の地も指しとるの味う入る



○都橋記を後  
みよき歌四五首と存す橋記より

春暁

あけぼのやうららかにあけぼの

薫るはるけき暁

春草

山吹をうららかにうららかに

よきをうららかに春のあ

新柳

あけぼのうららかにあけぼの

うけこのまじき友木とて

池草

新風よきはのやえ露とて



山家

晴昼

あはれとて心もよそふて花のさき

はらふおとろくも晴もあはれ

山家

あはれとて心もよそふて花のさき

はらふおとろくも晴もあはれ

山家

あはれとて心もよそふて花のさき

はらふおとろくも晴もあはれ

あはれとて心もよそふて花のさき

山ほきさきさきあはれとて心もよそふて花のさき  
はらふおとろくも晴もあはれ  
あはれとて心もよそふて花のさき  
はらふおとろくも晴もあはれ

あはれとて心もよそふて花のさき

はらふおとろくも晴もあはれ

あはれとて心もよそふて花のさき

はらふおとろくも晴もあはれ

あはれとて心もよそふて花のさき

はらふおとろくも晴もあはれ



那須野の原を

しつこくともやせとむさほむ

まほしむるまのゝん〜のん〜

山の位極〜のん〜のん〜のん〜

な〜ん〜のん〜

擁ち〜のん〜のん〜のん〜

あ〜ん〜人のたを擁ちむ

あ〜ん〜のん〜のん〜のん〜

い〜ん〜のん〜のん〜のん〜

〜ひて

多分経ておれ〜のん〜のん〜

あ〜ん〜人のたを擁ちむ

九月廿の夜寝るの夜あら〜のん〜

〜ん〜のん〜のん〜のん〜

かま〜のん〜のん〜のん〜

〜ん〜のん〜のん〜のん〜

た〜のん〜のん〜のん〜

い〜ん〜のん〜のん〜

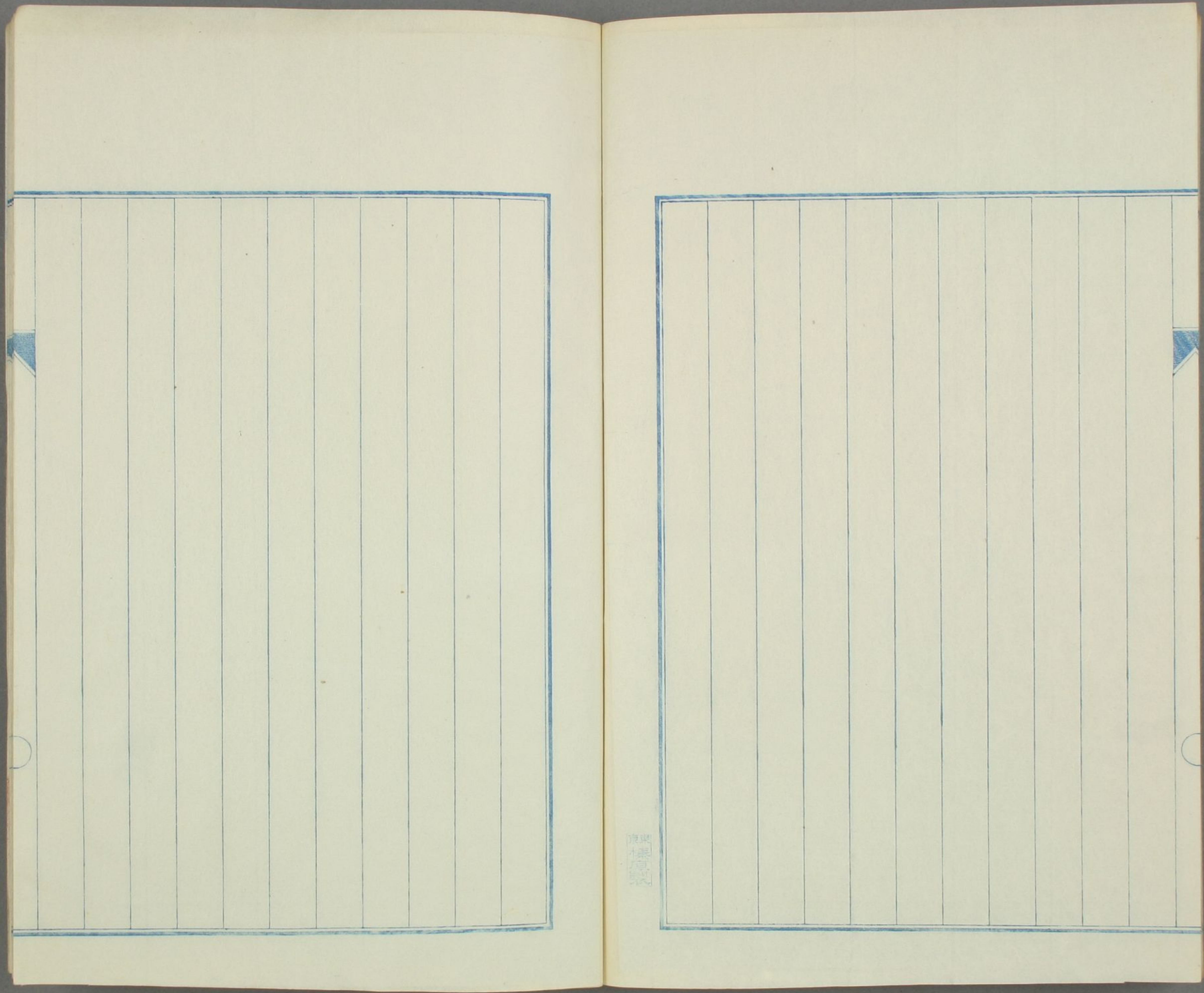












源  
本  
記







十餘品を擧げてあるが今日の追々増加して予が梅  
花新譜に選んだの殆んど三百餘品の多きに達し  
尙漏れたもの尠なからぬやうだ尤も斯く多數の種  
類のあるが是を大別すれば結局矢張十種に過ぎな  
いのである即ち野梅生、豊後生、難波生、摩紅生、紅  
糾梅生、杏生、寒紅生、紅筆生、唐梅生、及び冒梅  
類等であつて冒梅類ハ臘梅、雀梅の如く名のみ梅  
に屬し其實ハ別種であるから茲にハ省き他の九大  
種類について述ぶる前に梅の姿を説明するの必要  
がある

杏生



知つて居るが「花替り」と云つて菊の花の如く細  
のもの、蓋のみ發育して瓣の縮少したもの即ち藍  
咲、瓣白く藍紅さもの瓣も蓋も總て紅色のもの又  
ハ紅覆輪、口紅で蓋の紅さもの等がある其の外に  
「絞り」と稱へて更紗の如く薄紅の斑紋を現はすも  
のものもある

「枝」にも種々あつて篠とか枝垂とか云ふもの又ハ  
筋入りと云つて新芽の際より青軸に白條の現はれ  
るもの、錦生と云ふ枝に藍甲色の斑あるもの或ハ  
香家梅のやうな枝替りと云つて青軸に烈しい屈曲  
があつて枝珊瑚の形をしたものもある、次に「葉」  
ハ細葉と常葉「幹」ハ大小或ハボリ物又「實成」と云  
つて花より實を貴ぶ種類など皆是れ大体の梅の姿  
である

梅の話(中)

笑月

梅の九大種類ハ前に記した如くであるが其内より  
出た多數の銘花ハ一々其形を云現はす事ハ出来ぬ  
唯重なるものを選んで一斑を記すのみである

△野梅生 此種の最も世に多く線日物の冬至梅  
を始め上中下の差別こそあれ廣く愛されて居る梅  
で香氣も高く花ハ早咲で紅白又ハ絞り等がある殊

東洋原産

に近年ハ盆梅と云へば殆んど此野梅生のものに占  
められて露價大に揚つて居る、此種の一重咲の部  
でハ茶青(青白大輪)が逸品で花香俱に賞すべきも  
のである、掛出の鷹ハ薄移紅の大輪で品位茶青に

廊縣



亞々此移り紅と云ふの元が白であつて夫に紅梅  
の色が移つたもので實生にハ往々移り紅又ハ移白  
を出す事がある古今集と云ふのも此種である、冬  
至梅ハ篠造りの安物から上等の盆梅まで合んで居  
る、花ハ白の中輪で軸ハ錦生と筋入とある、紅冬  
至ハ中紅小輪で品位遙かに劣る其他白大輪ハ田  
子の浦、石清水、満月、芳流閣、太庚嶺、太白嶺、

草紙洗等、薄色でハ玉の鬘、風流、又絞りでハ寶  
合、日月梅等が上花の部である、廊縣と云ふのハ  
藍咲と云ふ花替りで花極小、葉のみ長く育つ花  
で實際ハ微り妙でない又極小輪にハ米良と云ふ花  
がある、實成の部の養老と云ふのハ枝垂性の薄色  
中輪である夫から八重咲の部で矢張八重茶青、大  
輪線勢などを名花と云ふ梅花の部ハ大概皆紅色で  
あるが線勢ハ名の通り全く綠色である是ハ花ハ  
青白だが中々古い銘花で單瓣のハ線勢一重と云ふ  
青白中輪で月影、白大輪で八重青龍、水心鏡など  
屈指の花である、絞りハ春錦東更紗其他七八種に  
過ぎない此外鶯宿梅の如きハ黄白と云つて黄味を  
帯びた白色、絞隠梅、籠の梅等ハ移白の大輪、長  
壽梅、大明梅の如きハ裏薄紅の大輪で孰れも美事  
の花である、花替りにハ雪の曙と云ふ單青白で藍  
の紅い小輪の花があるが非常に綺麗で俗受けのす  
る品である

△難波生 花ハ薄紅中輪の八重で最も晚咲であ  
る花弁ハ至つて密に重なる方で香氣ハ高い、幹ハ  
野梅と同様で青軸の筋入或ハ錦生、葉ハ細葉であ



紅華生



此種に属するの難波紅、唐錦、薄紅葉等で難波紅は二月頃の縁日に澤山持出される

△摩紅生 本紅の八重で軸赤く銅があるが軸の心は赤くない而して極晩咲で銘花に加賀紅、摩紅玉等といづれも中輪である

梅の話(下) 笑月

△豊後生 花の中季咲で勢強く軸の太い大輪の性で香氣の低いけれど其草屬なことの九種類の内第一である併し野梅の縁や茶青に比して少しく

品位の低いのは是非がない此種の一重咲の部では倉深の月と云ふのが一等で白の大輪、番付にも行司に据る位の花である、都鳥の白口紅の大輪で妖艶と云ふ姿、千代鶴の白色の最も冴えたもの、谷の雪と云ふのも中輪だが眞の雪白で殊に苔の口を切つた所、深溪一點の雪を暈むが如く實に美事である是に蒸る雪、二月の雪の二種を加へて梅花の三雪とも稱したら面白からう、百千鳥と云ふ薄紅の大輪の今の品が稀れである、日の出の沖、旭の海、五大力など皆薄色の大輪で稻名鳥の移白の極大輪、又八重咲の部で蝶の羽重と云ふのが薄色大輪の品位ある花、是に次で武蔵野乙女の袖等皆名花である

△杏生 花の形の杏のやうで瓣の間が一々切れて居る、香氣も少なく軸の錯を持つて最も晩咲である  
△寒紅生 花の多く薄紅で中に大輪のものもある幹の赤味を帯びて居るが心は赤くないので此種も至つて少ない先づ寒紅梅、八重寒紅、御所紅等に止まつて居る  
△紅華生 幹の高く節立つて他に類がない、花

の端の先が尖つて薄く口紅をさした小輪である、紅筆、爪紅、旭鶴等がある  
△紅梅緋梅及び唐梅生 皆殆んど同一種で紅梅の名の通り色が紅く八重一重と底紅の三種ある其軸の必らず心が赤い、折つて見れば知れる、緋梅生は現今品少である花の深紅で黒味を帯びて居る、幹も紫が、つて心の紅梅の幹より一層紅い、唐梅生は紅梅の花の縁が少し白くなるばかりである、乃で紅梅の部で一重の大盃が大輪で美麗無比の花である、紅鶴、旭貝、玉光等ハ孰れも本紅大輪、中輪でハ佐橋紅、紅葉狩、中紅中輪で兒紅

小田紅梅等また八重でハ未開紅、紅牡丹等である緋梅生の一重咲ハ大輪緋梅と云ふのがある一体緋梅ハ小輪が通例では其内最も大きいので大輪と云ふもの、外に比してハ漸やく中輪位に過ぎぬのである、夫から旭曜梅、筋入緋梅等二三種しかない、八重咲でハ猩々紅、光輝、鹿兒島等皆中輪である、唐梅生にハ村千鳥、單唐梅其外ハ未だ多く實見せぬので判らぬ  
大体右の如くて數百種の花も以上の九種類の内を

既せぬのである尙是について記したい事もあるが他日梅花の候にでも譲つて茲にハ單に種類だけに止めて置きます (完)







--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

興泰厚製







明治三十五年

三月下澣

春城山人